

東日本大震災の追悼行事に関する一考察

Why Individuals Participate in the Commemorative Ceremonies of the Great East Japan Earthquake and Tsunami?

○飯塚 明子¹Akiko IIZUKA¹¹宇都宮大学 留学生・国際交流センター

Center for International Exchange, Utsunomiya University

Ten years have passed since the Great East Japan Earthquake and Tsunami hit the Tōhoku region of Japan in 2011 and many organizations organized tenth-year commemorative events on March 11, 2021. Commemorative events play an important role in long-term recovery phase, but the motivations and purposes for participating in such ceremonies vary depending on individuals. The purpose of this study was to explore why individuals participated in the tenth-year commemorative ceremonies for the Great East Japan earthquake and tsunami. The study setting was an area called “Yuriage,” a town located in Natori City in Miyagi Prefecture and a questionnaire survey and interviews were conducted. The study found that participants had various reasons for joining the ceremony. Eighty percent of the participants joined to pray for the dead, while 45 percent joined to share their emotions with others. Additionally, 40 percent answered that they joined with the intention of handing down the lessons and memories of the disaster to the others.

Keywords : disaster, ceremonies, rituals, Great East Japan earthquake and tsunami, volunteers, Yuriage

1. はじめに

東日本大震災から10年が経過し、2021年3月11日には、政府や自治体、市民団体等、多くの関係機関が震災の追悼行事を行った。新型コロナウイルス感染症を考慮し、人数を限定して対面で行ったり、オンライン、又は対面とオンラインの両方で行った事例もある。災害の追悼行事を行うことは、心理的、社会的、及び政治的な要素を含み、短期的、及び長期的な復興において、とても重要な役割を担う¹⁾。

毎年東京の国立劇場で行ってきた政府主催の「東日本大震災追悼式」は震災10年を一区切りとし、2022年以降は追悼の在り方を見直すとしている。一方、被災者の心のケア等の課題や災害の記憶の風化を懸念する声もある²⁾。1995年の阪神淡路大震災の20年後の調査で、「追悼行事は続けるべきか」の質問に対して、「続けるべきだ」と回答した人は42%で、「区切りをつけてやめるべきだ」と回答した人(22%)の約2倍である³⁾。続けるべきと答えた人の約6割が追悼行事の運営に「既に協力している」、「今後、協力できる」と答え、住民自身が追悼行事に参加し、協力したいと考えていることが分かった²⁾。追悼行事に参加する動機や目的は、個人の経験や被災の度合い、災害の種類や規模、地域との関わり、災害後の年数、宗教等により異なると推測されるが、研究対象としてこれまであまり検討されてこなかった⁴⁾。本研究では、災害後の追悼行事の目的や意義に関する先行研究を整理し、東日本大震災発生後10年目の追悼行事に参加する動機や目的を理解することを目的とする。

2. 先行研究

災害や戦争の追悼行事についての研究は多くはないが、過去には主に文化人類学者、社会学者、心理学者が死者

を追悼する儀式についての研究を行ってきた⁵⁾。福田によると、追悼式や慰霊祭は「パターン化された集合的行為」で、過去の悲惨な出来事を想起し、死者の冥福を祈り、今後同じような被害が起こらないようにするための共同の行為と定義した⁴⁾。Eyreはイギリスにおける大規模な事故や爆発を事例に、追悼行事は災害直後と復興過程の両方において、心理的、社会的、さらに政治的に重要な意義があり¹⁾、過去の災害について思い起こし、復興に向かうための機会と捉えている⁵⁾。

追悼行事には様々な形式がある。家族や近隣住民で小規模に集う私的な行事もあれば、災害について思いを持つ多数の人々が集まる大規模な行事や、政府や自治体が主催する公的な行事もある。イギリスで政府が行う追悼行事は教会や大聖堂で要人が出席して行われることが通例である⁵⁾。1989年に米国のカリフォルニア州で発生したロマ・プリータ地震の後には、地震発生時刻に街の広場の時計塔に人々が集まり、政治家がスピーチをしたり、赤十字社が風船を配布し参加者が飛ばしたり、歌や手紙を通して亡くなった人をたたえたりした⁶⁾。

東日本大震災で被災した自治体が行う追悼式は、そのほとんどが内閣府からの申し出を受け、東京で行われる政府主催の追悼式をスクリーンで中継する。祭壇には、死者を表象する標柱が立てられ、黙とう、政治家や遺族代表による挨拶、献花が行われることが一般的である。それらの多くは、地元の葬儀社や葬儀社組合、大手広告代理店により一般的な慰霊祭の形式に従って実施される⁷⁾。

政府や自治体主催する追悼行事だけではなく、様々な機関が追悼行事を実施している。阪神淡路大震災10年後の2005年に、「市民による追悼行事を考える会」は、追悼行事を行う65の市民団体の記録をまとめて発行し、

犠牲になった人々を追悼し、震災の経験を次世代に、そして国内外に語り継ぐために、追悼行事を存続する意義があるとした⁸⁾。神戸新聞の調査によると、1995年の阪神淡路大震災20年目の追悼行事で、「なぜ追悼行事に参加したか」という問いに対して、参加した人の53%が「震災を思い起こし、記憶を心に刻みたかった」からと答え、29%が「亡き人をしのび、冥福を祈りたかった」、2%が「震災前や直後に知り合った人に再会できる」、15%が「その他」と答えている²⁾。

東日本大震災後においては、南三陸町における震災1年後のコミュニティの追悼行事「南三陸の海に思いを届けよう」を記録した論文には、『心を整理するきっかけ』をつくり、『自分自身に向き合う静かな時間』をもち、皆で悲しみを共有する」という意図があったと記されている⁷⁾。新型コロナウイルス感染症の影響で大船渡で無観客で開催された震災メモリアルイベントでは、震災のイベントは、被災者が亡くなった方を偲び、自らの被災体験を思い出す場として、追悼行事の重要性を明らかにした⁹⁾。また東北地方に古くから伝わる獅子踊りと言った民族芸能には「供養」や「鎮魂」と言ったテーマもあり、家族を亡くしたり、家を失ったりした人が死者を弔ったり、復興を願うという理由で演じる行事が沿岸各地で行われた¹⁰⁾。

災害後国内外で様々な方法や規模で追悼行事が行われ、参加する人々の動機や目的は多様である。本研究では東日本大震災10年目に際し、追悼行事を実施した機関から聞き取り調査とアンケート調査を行う。

3. 方法

(1) 調査の手法

追悼行事を実施する機関は様々であるが、本研究は個人が追悼行事に参加する動機について明らかにするため、政府や自治体が行う追悼行事ではなく、民間の団体が実施した追悼行事に焦点をあてる。

本研究の調査手法は、質的、量的手法の両方を用いる。量的手法では、宮城県名取市閑上地区で活動する「閑上の記憶」の協力を得て、「閑上の記憶」が実施した追悼行事の参加者からアンケート調査を行った。主にオンラインで追悼行事に参加した人を対象に、調査の目的と用途を明らかにした上で、オンラインでアンケートを行った。アンケートは回答者の基本的属性と、追悼行事を知ったきっかけ、追悼行事に参加した場所と理由、及び感想、今後についてを選択式の質問で聞いた。

アンケートの内容は追悼行事という被災者にとって繊細な事柄であること、回答者数が多くないことと、個人の目的や経験は多様でアンケート調査だけでは十分ではないという量的手法の限界を鑑み、インタビュー調査も用いた。インタビューは追悼行事を実施した宮城県の2つの市民団体の関係者に、追悼行事の実施と目的についての聞き取り調査を行った。

(2) 調査対象の概要

宮城県名取市の閑上地区は、名取川南岸の太平洋に面し、閑上漁港を有する。東日本大震災で壊滅的な被害を受け、震災前までは約5,000人が住んでいたが、700人以上が津波で亡くなった⁸⁾。現在は、閑上漁港の朝市が再開され、水産加工工場、震災メモリアル公園、震災復興伝承館が建設され、盛り土によりかさ上げされた造成地に復興住宅が建設されている。

「閑上の記憶」は、閑上地区に所在し、14人の中学生を亡くした旧閑上中学校の遺族会が建立した慰霊碑を守り、被災者を含む地域の人々が集う場所となっている。また、震災の資料を展示し、被災者による語り部や案内人活動を行い、震災やいのちの大切さを伝える取り組みを行い、国内外から約12万人の人が訪問している。

4. 結果と分析

(1) 「閑上の記憶」の追悼行事

震災の1年後の2012年3月11日に、閑上中学校遺族会慰霊碑の除幕式が行われ、2013年以降「閑上の記憶」は毎年3月11日に「閑上の記憶 追悼のつどい」を行っている。10年目となる2021年3月11日は、新型コロナウイルス感染症の対策を取りながら、「閑上の記憶」に450人が集い、生配信を行ったインスタライブには、3月11日から15日の間に331人が参加した。

追悼行事は、館長の挨拶から始まり、震災後につながりができた日航機墜落事故連絡会の関係者、閑上中学校遺族会代表で、当時中学生だった子供を亡くした方の挨拶があった。挨拶の中で鳩風船を飛ばすことは人を集めるためのイベントではなく、我が子へメッセージを届ける追悼であると語った。鳩風船は震災で亡くなった天国の子どもへ手紙を書きたいと思ったことがきっかけで始まり、子どもに生まれてきてくれてありがとうという思いのこもったメッセージであると伝えた。その後、地震が発生した14時46分に黙とうを行い、371個の鳩風船を飛ばした(図1)。



図1 「閑上の記憶」の前で飛ばす鳩風船
(出典：閑上の記憶フェイスブック)

(2) アンケート回答者の基本的属性

アンケート回答者の基本的属性は表1の通りである。性別は女性が20名(69%)で男性の9名(31%)より多く、年齢は50代が11名(38%)で最も多いが、20代から70代までの参加者がいる。参加場所は半分以上が宮城県外からの参加で、兵庫県や沖縄県等、被災地から遠い地域からオンラインで参加している。アンケートによると、オンラインで参加した理由は、「コロナ禍だから」(39%)、「離れた所に住んでいるから」(32%)という理由が多かった。

表1 基本的属性

性別 (n=29)	男性 9人 (31.0%) 女性 20人 (69.0%)
年齢 (n=29)	20代 1人 (3.5%) 30代 5人 (17.3%) 40代 4人 (13.8%) 50代 11人 (38.0%) 60代 6人 (20.7%) 70代 2人 (6.9%)
参加場所 (n=27)	宮城県外 (東京都、兵庫県、長野県、沖縄県、神奈川県等) 14人 現地参加 6人 名取市 5人 仙台市 1人 不明 1人

(3) 追悼行事に参加した目的、及び動機

本研究の問いである追悼行事に参加した目的、及び動機について、アンケートの結果は表2の通りである。追悼行事に「参加した理由は何ですか」（複数回答可）の質問に対して、約8割が「亡くなった方を追悼するため」と答えた。他には「他の参加者と思いを共有するため」と答えた人が45%で、「震災を語り継ぎたいから」、「閉上の記憶の行事だから」と答えた人が41%を占めた。また「震災10年の3月11日だから」と答えた人は31%で、「毎年参加しているから」と答えた人は28%で、「鳩風船を飛ばしたいから」と答えた人は24%を占めた。「11年目に向けて歩みたいから」と答えたのは20.7%で、「被災者だから」と答えた人は14%を占めた。その他(17.2%)には、「東北が好きだから」や「できることをお手伝いしたいから」等の理由が含まれた。29人のうち25人が複数に回答し、平均すると1人につき3つの理由を回答したことから、追悼行事に参加する理由は1つではなく、複数の理由があることが分かった。

表2 追悼行事に参加した理由 (n=29、複数回答可)

亡くなった方を追悼するため	23人 (79.3%)
他の参加者と思いを共有するため	13人 (44.8%)
震災を語り継ぎたいから	12人 (41.4%)
「閉上の記憶」の行事だから	12人 (41.4%)
震災10年の3月11日だから	9人 (31.0%)
毎年参加しているから	8人 (27.6%)
鳩風船を飛ばしたいから	7人 (24.1%)
11年目に向けて歩みたいから	6人 (20.7%)
被災者だから	4人 (13.8%)
その他	5人 (17.2%)

(3) 参加した感想や今後について

参加した感想については、「大変よかった」と答えた人が19人(66%)で、「大変よかった」又は「よかった」と答えた人が、87%を占めた(図2)。その理由(自由記述)としては、「参加している人々の気持ちが一になっているのを感じた」、「こんなに気持ちに寄り添う追悼式はないので」、オンラインでも「一緒に参加できているようでよかった」、現地に行くことはかなわなかったけれど、共に祈りの時間を過ごせたから、「同じ時間を過ごすことが出来、思いを新たにすることが出来たから」という記述があった。

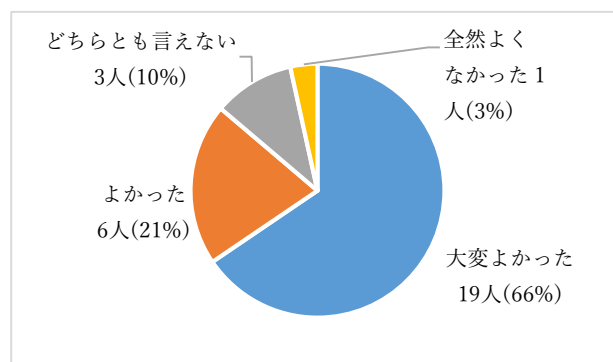


図2 参加した感想

今後については、「来年も参加したいですか」という質問に対して、「状況が許せば、現地に行って参加したい」と答えた人が16人(60%)で、「ぜひ参加したい」と答えた人が6人(22%)となり、震災11年目以降も追悼行事に参加したいと思っている人が多いことが分かった。

5. 議論と考察

(1) 追悼行事に参加する意義

本研究のテーマである追悼行事に参加する理由については、ほとんどの人が亡くなった方の追悼と答え、先行研究と同様の結果である。他の参加者と思いを共有するためと回答した人も半数いることから、同じ場所とタイミングで悲しみや痛みを共有する機会として、心理的な効果があるとする先行研究と同様である⁹⁾。

阪神淡路大震災の20年後の調査では、震災を思い出して語り継ぎたいと答えた人が一番多く、亡くなった方の追悼が二番目に多かったが、東日本大震災10年後の本調査では、亡くなった方の追悼の方が約80%と最も多く、震災を語り継ぎたいと答えたのは約40%であった。時代背景や調査方法の違いもあるが、震災後どのくらいの年月が経っているのかにより参加理由が異なり、東日本大震災20年後に調査をする場合、震災を語り継ぎたいと答える人が多くなるのではと推測する。

先行研究にはなかったが、「閉上の記憶の行事だから」、「毎年参加しているから」と答えた人も一定数いたことから、追悼行事だけではなく、震災後から閉上の記憶の活動に関わっている人が、追悼行事に参加していることが分かる。「できることをお手伝いしたい」という理由もあり、閉上の記憶の活動をボランティアとして参加しサポートしていることが分かった。阪神淡路大震災の追悼行事を「続けるべき」と回答した人の中で、運営に「協力している」人は13%で、「今後、協力できる」と答えた人は42%いたことから、約6割の住民が追悼行事に協力する意思があることが分かっている。閉上の記憶の追悼行事の運営方法を震災11年目以降は再考するという話もあり、閉上の地域の人々やボランティアがどのように追悼行事を継続していくのが期待される。政府主催の追悼式は10年目で最後となり、個人や地域がそれぞれの復興状況を踏まえて、追悼行事の運営についてオーナーシップを持つことが重要である⁹⁾。Eyreの言葉を借りると「被災者のエンパワーメント」の向上を視野に入れた地域による追悼行事の関わり方を議論することが重要である⁹⁾。

(2) 思いを届ける象徴

関上の記憶が実施した追悼行事で特徴的な点は、鳩風船を飛ばすことである。追悼行事に参加した理由として、「鳩風船をとばしたいから」と答えた人は 24%で、一定数いることが分かった。震災 1 年後である 2012 年 3 月 11 日に、関上中学生の慰霊碑の除幕式が行われ、翌年の 2013 年 3 月 11 日から毎年鳩風船を飛ばしている。追悼行事で鳩風船が象徴する意味は前述の通りで、天国にいる亡くなった息子へメッセージを送りたいと言う関上中学校遺族会代表の方の思いから始まった。

このような象徴は他の被災地でも見られる。例えば、がんばろう石巻の会が主催する追悼行事「東日本大震災 3.11 追悼のつどい」では、被災した人が震災直後から掲げている縦 2 メートル、横 11 メートルの「がんばろう！石巻」と書かれた看板の前で、追悼行事を行い、3 月 11 日に 4,620 人が現地で参加した。釜石の「三陸ひとつなぎ自然学校」では、「復興の灯り in 根浜海岸」を開催し、子どもたちによるバイオリン演奏やこれまで活動に携わってきた若者たちのメッセージトークなどを配信し、当日「白菊」と呼ばれる鎮魂花火を大槌湾に打ち上げた¹²⁾。毎年神戸市の東遊園で実施される「1.17 のつどい」では、メッセージが書かれた竹灯籠に火を灯し、黙とうを行う。様々な被災地で、追悼行事に参加する人々の思いを込める有形、又は無形の象徴があることが分かる。

(3) コロナ禍における追悼行事について

コロナ禍で多くの機関が対面の追悼行事を縮小したり、オンライン配信を行った。「関上の記憶」の追悼行事には、3 月 11 日から 15 日の間に 331 人がインスタライブで追悼行事に参加した。「がんばろう石巻の会」の追悼行事には、当日に約 400 回の YouTube の配信動画の再生があった。コロナウイルスに感染するリスクを避けるだけでなく、心身の状況、家庭の事情、時間的な都合等から、オンラインで追悼行事に参加する人が増えている。オンライン参加者のアンケート回答には、「関上の風の音が聞こえて臨場感があった」、「リアルタイムで見られたのは一緒にいる感じがしてよかった」という回答がある一方で、やはり現場で参加したいという回答もあった。コロナ禍ですすむデジタル化は、より多くの人々が参加できる選択肢の一つとして、災害の経験を次世代に、国内外に語り継ぐために、今後も有効であると考えられる。

6. 結論と今後に向けて

本研究では、災害後の追悼行事の目的や意義に関する先行研究を整理し、東日本大震災における 10 年目の追悼行事に参加する動機や目的を理解することを目的とする。特に甚大な被害を受けた名取市関上地区で活動する「関上の記憶」が実施する 10 年目の追悼行事を事例に調査を行った。その結果、追悼行事に参加する理由については、参加した 8 割の人が亡くなった方の追悼と答えた。次に、半数近くの人が他者とも思いを共有すること、また震災を語り継ぐことと回答した。また追悼行事に参加する理由の一つではなく、複数の理由を持った人々が日本全国から参加したことが分かった。震災後から関上の記憶の活動に関わっている人が、追悼行事も参加していることが分かり、地域の人々やボランティアが今後どのように追悼行事を継続していくのが課題である。

また被災地の追悼行事では、参加者が思いを込める象徴が存在することが多い。その点で、追悼行事は亡くな

った方や、被災した方、被災した町、また自分自身に対して、思いやメッセージを込めて伝える行事であることが分かった。

震災から 10 年が経過し、多くのマスコミが取材し取り上げるものの、追悼行事は被災者にとっては繊細なテーマである。追悼行事は悲しみを共有する心理的な効果があるとする一方で、様々な理由から追悼行事に参加できない人も多くいることが現状である。コロナ禍ですすんだ追悼行事のデジタル化は、地域や世代を問わず、より多くの人々に災害の経験を語り継ぎ、様々な事情から現地に行くことができない人にとっても一つの選択肢になるかもしれない。

謝辞

調査にご協力いただいた「関上の記憶」、「がんばろう石巻の会」、及び「Civic Force」の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。本研究は旭硝子財団「サステイナブルな未来への研究助成」の研究課題「持続可能な復興を視野に入れた災害ボランティアの役割とは何か」の研究成果である。

参考文献

- 1) Erye, A.: In remembrance: Post-disaster rituals and symbols. *Australian Journal of Emergency Management*. pp. 23-29, 1999.
- 2) 神戸新聞：「阪神・淡路」追悼行事、継続望む 42%，2016 年 1 月 14 日。
- 3) 神戸新聞：震災追悼行事 継続は 6 割「協力したい」，2016 年 1 月 14 日。
- 4) 福田雄：災禍の儀礼論に向けて－現代日本における慰霊祭や追悼式の事例から－，関西学院大学先端社会研究所紀要，No.8，pp.73-89，2012。
- 5) Erye, A.: Remembering: Community commemoration after disaster. In: Rodriguez, H., E. L. Quarantelli and R. R. Dynes (eds.) *Handbooks of Sociology and Social Research*. Springer, NY, pp.441-455, 2007.
- 6) Phillips, D.B.: *Disaster recovery*, second ed., CRC Press, Boca Raton, FL, 2016.
- 7) 福田雄：南三陸町における東日本大震災の慰霊・追悼行事の調査記録－海・死者・震災といかに向きあうか－，関西学院大学先端社会研究所紀要，No.10，pp.33-43，2013。
- 8) 市民による追悼行事を考える会：追悼 10 年わたしたちの記録，2005。 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/6-345/index.html> (参照日：2021 年 5 月 21 日)
- 9) 北村美和子：Covid-19 ウイルスのため大船渡で無観客開催された震災メモリアルイベントの事例研究，デジタルアーカイブ学会誌，Vol.4, No.S1, 2020。
- 10) 阿部武司：東日本大震災を乗り越えて－沿岸部の民俗芸能復興の現状，震災復興と無形文化－現地からの報告と提言，東京文化財研究所，2011。
- 11) 名取市：名取市における東日本大震災の概要，2014。
- 12) Civic Force ホームページ：東日本大震災 3.11 追悼の集い， https://www.civic-force.org/news/news-2318.php?fbclid=IwAR3kqcNqUNDIAHM760Q_QLdq84RgOTcYuk--wohoxMLt_SqDjoSLg1Z47FU (参照日：2021 年 5 月 21 日)